

碩心

社団法人 日本詩吟学院岳風会 認可

神奈川 碩心会 発行

63年8月現在 会員数
逗子地区 170名
葉山地区 274名
大船地区 59名
(合計) (503名)

63年8月号 (193)
発行 者 萃
根 岸 岳
編 集 者 岳
中 村 愛 岳

詩吟と私

逗子A支部 石渡陽岳

私が碩心会に入会したのは、昭和48年春まだ浅き頃でした。今は亡き竹村梅岳先生にすゝめられましたのですが、私は歴史物語りや、人物本を読んでいたせい、自然のうちに仲間になって頂くことが出来ました。先輩も後輩も、又年令にも関係なく、向学心に燃え、詩吟のロマンを求めて15年が過ぎました。

逗子Aはサミットに根岸会長を頂き、三井先生、千葉先生御夫妻を始め、老いも若きも同じテキストで、和気藹々の雰囲気、生きがいを感じ、先取りの勉強をしております。

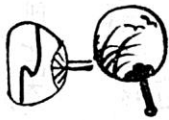
詩吟学院の年中行事の一つに全国大会があります。57年3月、第81回全国吟道大会が九段会館ホールで行われ、十人一組の合吟コンクールに出場させていただき、全国第三位入賞神奈川県女子部と発表された時は「やった!」と感激し、よかったネと拍手して喜びました。其の時のリーダーは真澄支部の村田先生でした。

この時も多くの先生方に応援していただき、御指導御鞭撻、全く統一本の線になっ

て一生懸命の勉強でした。其の時の十人は皆健在で、碩心会上部に御活躍、吟道を以て、人格の向上、健康に精進していられます。九段会館に参集応援して下さいました多くの吟友に喜ばれ、お世話になった事は、今でも脳裡に残っており、感謝しています。

また59年8月、神奈川県本部主催の中国友好の旅(七日間)に本部長以下44名のツアーに同行させて頂き、成田空港より一路北京に向いました。百聞は一見に如かず、悠久四千年の歴史を持つ中国の都、北京天安門広場に向う人々が蟻の如くに見え、日本の23倍もの広さにびっくり、前以て逗子図書館で中国の参考書を借り、西安、成都上海と超スピードで勉強してから、万里の長城も私の足で登り、この眼でパノラマの如き風景を見、次々と歴史と詩吟に関係深い事を学習することができ、来てよかったですと満足しました。

これからも多くの吟友と和を広げ、21世紀に向って、岳風流統の精神を以て前進、碩心会員の一人として、今後共よろしく御指導下さいますようお願い申し上げます。



◎ 行事予定

第94回全国吟道大会参加

県本部吟行会

とき・63年10月1日～4日

コース・会津若松Ⅱ飯森山Ⅱ猪苗代湖Ⅱ

福島大会Ⅱ飯坂Ⅱ五色沼Ⅱ蔵王

Ⅱりんご狩Ⅱ上の山・他

(碩心会よりの参加者名)

- 根岸岳萃 加藤岳相 沼田洗岳 中村幸岳
- 千葉叙岳 千葉香岳 中村愛岳 杉山雪岳
- 佐藤湧岳 矢嶋悦岳 綾部秋岳 村田瀨岳
- 渡辺秀岳 石渡桂岳 白井寿岳 白井麗岳
- 高梨以岳 木村松岳 安田寿風 平山栄風
- 重松由風 板橋雅風 宇都宮徳風 田中朋風
- 松井正風 大屋正風 嶋村幸風 井上葉風
- 石戸倫風 高橋俊泉 (30名)

第44回 県本部吟道大会

とき・63年10月25日(日)

ところ・綾瀬文化会館

堀内支部25周年記念大会

とき・63年10月9日(日)

ところ・長柄会館

法人化20周年・第92回全国吟道大会の盛大なる祝典に出席して

松和支部 宇都宮徳風

(着席)

法人化二十周年盛會に

国技館埋む会員七千

(会旗入場)

各会旗百五十余旗一堂に

同志十二万心体して

各会旗百五十余旗の入場は

延々続き拍手くたびる

(松井理事長挨拶)

吟道に永遠の命を吹き込むは

祖宗遺訓我等伝えむ

(笹川夫妻の祝辞)

大会に錦上花を添えたるは

笹川夫妻の祝辞祝歌

(日本の四季吟詠)

日本の四季を北から南まで

詩歌九篇で見事吟ぜり

(来賓中国大使)

来賓の中国大使足停め

特に賞でたる神奈川の吟

(創作劇木村岳風)

劇で観る吟聖岳風人と為り

成功の蔭に偉い母あり

哭晁卿

(晁卿衡を哭す)

李白

日本晁卿辞帝都 (日本の晁卿帝都を辞し)

征帆一片遠蓬壺 (征帆一片蓬壺を遠る)

明月不帰沈碧海 (明月帰らず碧海に沈み)

白雲愁色滿蒼梧 (白雲愁色蒼梧に満つ)

(通釈)

日本の晁どののは長安を去り

遠く旅立つ船に乗り、船の帆の小さなひ

とひらが蓬壺のような日本をめぐった。

清らかな月のような晁どののは、青い海に

沈んで帰らぬ人となった。

白い雲が憂いを帯びて、蒼梧の海に広が

っている。

晁卿衡：阿部仲麻呂のこと。中国名を晁卿

または朝衡という。「卿」は仲麻

呂が就いた衡尉卿という官によっ

て呼んだもの。

帝都……長安のこと。

蓬壺……蓬来のこと。伝説にいう東方海上

の仙人の島。ここでは日本のこと。

蒼梧……昔、舜が死んだところ。湖南省南

部の九疑山のあたりだが、ここで

は広く、南方の海岸地帯をさす。

李白が交遊した詩人は、杜甫、高適のほか、阿部仲麻呂、王昌齡、賀知章らである。

李白は阿部仲麻呂と長安で出仕したころに知りあったといわれる。

仲麻呂は天寶十二年遣唐大使の藤原清河に従って帰国の途についたが、途中暴風雨にあい、安南(今のベトナム)に漂着し、再び長安の都にもどって仕え、ついに日本に帰らず没した。

李白は仲麻呂が死んだとの誤報を受け、この詩を作り、仲麻呂が安南に漂着して再び唐王朝に仕えたことを最後まで知らなかったようだ。

又仲麻呂が明州の港を出て、いよいよ中国を去るとき詠んだ歌はよく知られている。

あまの原ふりさけみれば春日なる

三笠の山に出でし月かも

名作のふるさと

逗子A支部 一柳道風

昭和の初期、私が子供の頃古老から聞いた事を思い出しながら書いてみます。老人は目を川の河口近く濁った川面を見つめながら話してくれました。明治時代は別荘地、その後海軍将校の家々が並ぶようになった。田越川にかゝる富士見橋からは江の島、富士山が一望に見えたものです。夏場は家を貸す人が多く、冬に借りにくる人があると

地元の人々は、胸でも思っているのではないのかと心配したものです。空気もよく、静かなものでしたよ逗子は…。

徳富蘆花が「不如帰」を書いた「柳屋」はこの橋そばにあり、駅からバスで五分程の処。大正二年発行の「逗子と葉山」に、明治三十年初版を出した小説「不如帰」はこの種小説中のオーソリティー。以来逗子の名は津々浦々まで知れ渡り、町役場の記録にまで「著者の功偉大なりと言うべし」と記し、「先生に謝する処深きが如し」とある。

明治22年横須賀線開通、同33年不如帰が単行本になり、同43年真白き富士の嶺で知られる、逗子開成ボート遭難がポピュラーとなった。

不如帰の主人武男と浪子が、千年も万年もと愛を誓い、後世浪子不動と親しまれた波切不動から鑑摺に到る磯があり、潮湯治海水浴には絶好の海だった。昭和33年代までは、夏は芋を洗うような人でごった返したが、海は次第に汚れ、同39年に湘南道路が出来、砂浜は狭くなり、浪子不動の磯もコンクリートの下に埋った。

先生が問借りしていた柳屋は旅館ではなく、雑貨店を営みながら部屋を貸していた。先生は愛子夫人と明治30年1月から四年間

滞在したが、先生が身を寄せた八ヶ月前までは国木田独歩が新婚生活を送った処でもある。先生はこよなく逗子を愛され、田越川も昔は葦が密生していたが、関東大震災で隆起して水量が減り、葦も少なくなってしまうた。

老人はまた話した。昭和29年、当時84才の時旅館を焼失「残念です」とひとこと…あとは葦の消えた川面をみつめながら、ありし日を思い出すかの如く、心なしか淋しそうでした。

私はそのように先生が良き地にいられて、良き詩を書かれたその中の一つ「自然と人生」は世の人々の心を打つ立派な詩であり、一節より四節まで、私の見た柳屋旅館の風景そのものであったと思います。

これからの若き世代へと、良きものは永遠に語り、亦吟じつがれてゆければと思ひ筆をとりました。(老人は初代柳屋主人)

風鈴の音も淋しき里の路

逗子八景とは

浪子不動の秋月 神武寺の晩鐘

披露山の暮雪 沼間の落雁

桜山の晴嵐 小坪の帰帆

山野根の夜雨 田越川の夕照

練吟 音便

○鎌倉駅前小町通りに「目耕堂」という大きな本屋がある。その「目耕」の由来。

王詔は、家は貧しいが勉強好き。以前のこと、三日ほど食事もしないで本を読み続けた。家の者がこんなに困っているのに、なんで畑を耕さないかとなじったところ、詔はおもむろに返事をした。

「おれはいつも目を耕しているんだよ」右の中国の故事から「目耕堂」の店名が出た。詩吟で健康維持はまことに結構。だがたまには目耕もよろしいのではないか。

○昭和30年代の高校漢文教科書を見ていたら、頼山陽の「天草洋に泊す」の詩の中で次の二句中の・の箇所が気にかかった。

(一)煙はほう窓に横たわりて日漸く没す

太白船に当りて明かなること月に似たり
学院の教本はもちろん次のとおり

(二)煙はほう窓に横たわりて日漸く没す
太白船に当りて明 月に似たり

NHK「漢詩をよむ」(石川忠久教授)は
(三)煙はほう窓に横たわりて日漸く没す
太白船に当りて明 月に似たり

○漢詩はもともと中国の文語文で書かれている。それを日本の文語法にしたがって国

文として読むのが訓読。前例(一)の「横たわりて」と「当りて」の「り」は、音便で変化する前の元の形である。それが例(二)や(三)のように、発音の便宜上から動詞の語尾の音「り」がつかまる音「つ」に変化して「横たわつて」や「当つて」になった。これを促音便(そくおんびん)と称する。なお、りのほかにち、ひが同じ作用をする。

○動詞の音便だけでも「イ音便」「ウ音便」「はつ音便」などあるが、それはさておき、教本登載の漢詩でも句によっては音便を使ったり使わなかったり、かと思うと一句の中で二度三度使ったりするものも出て

いるので、一体どのような見解で音便を処理しているのであろうか。と疑問を抱かざるを得ない。試みに、弱吟の時は本来の読みそのままとし、強吟の場合又は言葉の強意の場合に促音とするなど憶測してみたがそうでもない。結局吟詠の場合の読みは、詩を吟ずる者にも、それを聞く者にも、快適な節調で詩心が伝達されるよう配慮し検討されているのではないか、と思うが如何。○途中でお気づきの方もあったと思うが、例文の「太白舟に当りて明 月に似たり」と「太白舟に当りて明かなること月に似たり」のほかに「太白舟に当りて月よりも明かなり」の訓読例がある。ご参考まで。

(入会)

848 須藤謙典 葉山町下山口一八六

(下山口) (電)〇四六八一七八一八五四六

849 石渡芳子 逗子市桜山八一八一二三

(諏訪) (電)〇四六八一七一〇二七

850 梅原幸枝 横浜市栄区元大橋一三二六一七

(大船A) (電)〇四五一八九一六四六四

851 田中三子 横浜市栄区亀井町二〇一七高橋方

(大船A) (電)〇四五一八九四一五三四七

852 白井照子(再) 葉山町一色一二六二

(逗子B) (電)〇四六八一七五一〇二四

(退会)

826 211 岡野和風(桜山B) 378 深川春山(唐木山)

839 生井美智子(若葉) 839 池田正子(星山)

今年は記録破りの長梅雨で、やっと太陽が顔を出したと思ったら、又台風の接近で昨日も、そして今日も雨：よくもくと思

う毎日です。

次から次へと行事に追われる昨今ですが貴重な夏休みのせめて前半位は自分の好きなことでもと心にいゝ聞かせ実行。八月に入ったら早速秋の行事の心の準備にきりかえ、まずはこの月報の編集を終り、ホッとひと息。そして又次の仕事へと：正直いってもう少しのんびりしたいなあと思うのですけど、ボケどめにはいゝかなあ…。